

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12338

研究課題名（和文）『自衛－独立ユダヤ週刊新聞』についての統合的研究－創刊から1920年代中盤まで－

研究課題名（英文）The Self-Defense-Independent Jewish Weekly News: A study of the First Issue to the mid-1920s

研究代表者

中村 寿 (NAKAMURA, Hisashi)

秋田大学・教育文化学部・講師

研究者番号：40733308

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』（1907～1938）はブラハで出版されていたドイツ語による週刊新聞である。その活動目的はチェコ地域に在住するドイツ系ユダヤ人の利益を擁護することであった。この新聞からは、ユダヤ人の同一性をめぐる議論の諸相を聞き取ることができる。本研究では、民族・文化政策の側面からこの新聞を分析した。『自衛』はオーストリア多民族連合を想定し、その枠内での他民族との平等を展望していた。『自衛』の展望は、パラツキーほか19世紀中・東欧の連邦主義者による構想をさらに発展させたものであった。『自衛』の文化的ナショナリズムは、プロートほかドイツ語作家にユダヤ人を代表する小説を要請していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ文学研究では、ブラハを拠点に活動したドイツ語作家に対する『自衛』の影響に注目してきた。文献へのアクセスが容易でないため、『自衛』の読解を進め、その内容を仲介することは、ドイツ文学研究に対する貢献になる。『自衛』はドイツ語で出版されていたが、その活動場所はチェコであった。この新聞は宗教的少数派であるだけでなく、言語的少数派による媒体でもあった。この新聞と関連文献からは、少数派問題の諸相が明らかになる。『自衛』の研究は、ドイツ文学だけでなく、ユダヤ人研究、中・東欧近現代史、思想史研究の知見にも貢献しうる。

研究成果の概要（英文）：Self-Defense-Independent Jewish Weekly News [Selbstwehr] (1907-1938) was a German language weekly newspaper in the former Czechoslovak Republic. The Newspaper represented the national interests of German Jews as a religious and linguistic minority within the republic. We can see various facets of discussions concerning German-Jewish identity from this newspaper. In this research project, national and cultural issues were examined through the weekly news and other relevant materials. Self-Defense paid close attention to the reorganization of the Habsburg state from the Austro-Hungarian double monarchy to a national league in middle and eastern Europe, in which Jews could have enjoyed equal rights as a citizen. In this, Self-Defense adopted the ideas of nineteenth century federalists or autonomists in middle and eastern Europe. Cultural nationalism also challenged German novelists such as Max Brod and Franz Kafka to create a "Jewish Novel" symbolizing German Jewry.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 ユダヤ人研究 中・東欧近現代史

1. 研究開始当初の背景

『自衛—独立ユダヤ週刊新聞』(1907~1938)はプラハで出版されていたドイツ語による週刊新聞である。この新聞の編集者はユダヤ人であり、読者をユダヤ人に想定して、ユダヤ人・ユダヤ主義に関わることを専門的に報道していた。『自衛』の保存媒体はマイクロフィルムであり、国内の所蔵機関として数件が確認されるのみである。報告者は『自衛』についての研究で学位を取得し(2013)、それ以降も科研費の助成を受けながら、『自衛』の研究を続けてきた。本研究は報告者による個人研究若手 B(2015~2018)の継続である。以下、これまでの『自衛』の研究を通じて明らかになった知見をもとに、研究開始当初の背景について述べていく。

『自衛』は自身をチェコ地域に居住するドイツ系ユダヤ人のための活字媒体であると定義した。一方で、実際はユダヤ人機関であるだけでなく、「民族的ユダヤ主義」の宣伝機関であった。「ユダヤ主義」の場合には主に信仰が想定されるのに対して、「民族的ユダヤ主義」には宗教だけでなく、政治的権利・文化などの概念が反映される。『自衛』はテオドル・ヘルツルの影響を受け、パレスチナ入植が始まると、積極的にそれを擁護した。『自衛』の思想的背景にあったのは、ドイツ系ユダヤ人によるナショナリズム(=シオニズム)である。彼らの民族主義はチェコ文学・東欧のイディッシュ文学に比肩しうるドイツ語によるユダヤ民族文学の創出をよびかけていた。カフカ、マックス・プロートらは『自衛』を通じて、ナショナリズムに触れた。

『自衛』のフィルムは不完全である。報告者は若手 B(2015~2018)の助成を通じて、オーストリア国立図書館を訪問し、フィルムの欠損部分の収集・デジタルデータ化を進めた。本研究はデジタルデータを読解する過程で浮かび上がってきた疑問を解消する試みである。

解明されるべき問題は、(1)オーストリア多民族連合構想、(2)「ユダヤ人の小説」をめぐる議論、の二点に分けられた。(1)はハプスブルク帝国のうちオーストリア側(ハンガリーを除く)を多民族連合化しようとする展望である。『自衛』では、リヒャルト・ハルマツ(1879~1965)の構想が参照されていた。彼は民族対立の原因をドイツ人とチェコ人の不平等に見出していた。(1)では、両者の対等な関係の構築がユダヤ人にどのような視座をもたらしたのかを検証する。(2)を通じて、プロートは民族的ユダヤ主義に接近していった。1911年当時、20代後半の若きプロートはシオニズムの存在を知ってはいても、それに関わりようとはしなかった。(2)では、『自衛』が小説家プロートの精神遍歴にどのような影響をおよぼしたのかを検証する。

2. 研究の目的

(1)ドイツ文学史への貢献

ドイツ文学史では、18世紀末からゲーテの死(1832)にいたるドイツ・ロマン主義期と、20世紀転換期から1945年にいたる二つの時期が特に生産的な時代とされる。前者にはドイツ語圏北部のドイツ地域の出身で、プロテスタントの出自をもつ者が多い。後者の作家たちの多くは南部のオーストリアとその周辺から出て、カトリックあるいはユダヤの出自であった。言い換えるなら、プロテスタントから始まったドイツ・ロマン主義は、中・東欧の民族主義を経由して、ユダヤ人に引き継がれたとも言える。国民文学史の枠組みでは、中・東欧の民族主義の影響が指摘されることは稀である。前世紀転換期のユダヤ系ドイツ文学は、ドイツ・ロマン主義とその影響を受けて始まった中・東欧の民族ロマン主義との接触の結果であると言える。ドイツ文学史に対する中・東欧のナショナリズムによる影響を指摘することは、ドイツ文学の多様性を呈示することにつながっている。

(2) <プラハのドイツ語文学> 研究への貢献

中・東欧のドイツ語文献へのアクセスは2000年代以降のデジタル技術の普及によってようやく可能になった。カフカやリルケによる著名作品としてのテキストに対して、『自衛』のような歴史文献は、共有されていた関心や問題を仲介するコンテクストとして認識されうる。カフカをはじめとする<プラハのドイツ語作家>は、『自衛』を購読してだけでなく、そこに作品を発表した。『自衛』はドイツ語作家にとってのコミュニケーション手段の役割を果たした。『自衛』の研究からは、個人作家によるテキストに対して、民族的ユダヤ主義を中心に展開され、彼らを相互につなぐコンテクストとしての線を可視化する効果が得られる。<プラハのドイツ語文学>の当事者をつなぐ線を描き出すことは、ドイツ語作家研究にとっても有益である。

(3)東欧近現代史、ハプスブルク帝国研究への貢献

ハルマツは歴史家であった。彼は二重帝国を記述・考察の対象とし、帝国のナショナリズムが国民統合にではなく、分断に向かう理由を、多民族国家としての様態に認めた。彼によると、二重帝国におけるドイツ人の歴史は、チェコ人をはじめとする他民族に対する妥協の経過である。その内容は、ドイツ語とチェコ語の対等な関係の構築のほか、使用言語申告をもとに住民をドイツ人とチェコ人に分類し、民族別に代議士を選出する民族別代表制の実践であった。民族間の不均衡に配慮しようとするドイツ系リベラルの意思は現代に通じる進歩性がある。その傍ら

で、妥協に対する抵抗として、ドイツ民族主義・反ユダヤ主義が勢力を拡大させ、ナチス党にいたる進路を開削していった。ユダヤ人がユダヤ人国家建設を目標とするうえで依拠した多民族連邦構想の諸相を検討することは、ユダヤ史だけでなく、東欧近現代史・ハプスブルク帝国研究への貢献にもなっている。

3. 研究の方法

本研究の特色はできるかぎり一次文献を使用した点にある。上述した通り、『自衛』はレオ・ベック研究所版のフィルムを使用した。フィルム未収録部分については、オーストリア国立図書館所蔵の現物を利用した。ユダヤ系のドイツ語定期刊行物はフランクフルト大学図書館デジタルアーカイブを参照している。ハルマツとプロートの著作については、リプリント版を使用した。手法において特筆すべきは、民族的ユダヤ主義をめぐる『自衛』と作家個人との議論のやりとりを記述したことを通じて、作品に対するコンテクストとしてナショナリズムの諸相を浮き彫りにした点にある。

4. 研究成果

(1)2018年度

初年度は『自衛』とハルマツの著作をもとに、オーストリア多民族連合構想の諸相を解明・記述した。普通選挙法(1907)を通じて、オーストリア帝国国会では、ドイツ人・チェコ人ほか諸民族が民族別に代議士を選出する民族別代表制が採用された。この民族別議席制が民族連邦制への布石になっている。その際、ユダヤ人は民族議席制の対象にはならなかった。この現状に対して、『自衛』はユダヤ人の議席設置を主張した。『自衛』では、ハルマツの『ドイツ系オーストリアの政治』に依拠、それを批判しながら、ユダヤ人も諸民族と対等なオーストリア市民として民族連合の傘下に加わることが展望されていた。

ドイツやイタリアのナショナリズムが国民統合に有益であったのに対して、オーストリアの場合にはそれが国民を分断させていた。ハルマツは民族問題の原因をドイツ人と諸民族の格差に求め、ドイツ人はこれまでの権利を手放しても、生存可能だと主張した。『ドイツ系オーストリアの政治』には、フランティšek・パラツキー(1798~1876)、アドルフ・フィッシュホーフ(1816~1893)、アウレル・ポポヴィチ(1863~1917)、カール・レンナー(1870~1950)にいたるまでの連邦主義構想の展開が記述されていた。連邦構想はオーストリア社会民主主義の綱領に表明されることになる(ブリュン綱領、1899)。民族連合構想には現代EUの文化政策にも通じるような進歩性があった。社会民主主義に対して、ドイツ人政党とキリスト教社会主義がドイツ人の利益確保・反ユダヤ主義を主張している。社会民主主義の民族政策に対するドイツ人政党の抵抗がヒトラーとナチスの出現につながっていた。雑誌論文1、学会発表1件。

(2)2019年度

『自衛』がドイツ文学に与えた影響を解明した。注目したのは、マックス・プロート(1884~1968)に対する影響である。プロートはカフカの遺稿編集者として知られるが、彼自身小説家でもあり、共和国の独立後には同国のユダヤ人政党にも所属し、政治にも関与した。オーストリア期の1911年5月、『自衛』は彼の小説『ユダヤの女たち』についての書評を公表し、それを通じて、プロートはユダヤ人の小説家として十分ではないという批判をした。2020年度はこの小説を対象に、民族的ユダヤ主義が若きプロートを否定的に評価した理由を検証した。

場所は北ボヘミアの温泉保養地テプリッツとプラハに設定されていた。話題の中心は、17歳の若者フーゴと保養客のイレエネによる出会いと別れであった。彼女の兄はユダヤ系のドイツ民族主義者であった。主人公とヒロインの背後には、ドイツ人とチェコ人の民族対立があった。作中では民族的ユダヤ主義・シオニズムの話題についても触れられていたが、登場人物たちはそのほとんどがユダヤ人であるにもかかわらず、彼らはユダヤ主義をめぐる議論には関心を示さない。該当年度の研究からは、『自衛』はユダヤ主義をめぐるプロートの無関心を問題視することを通じて、作家にユダヤ主義をめぐる議論に関与するよううながしていたのではないかという結論が導き出された。雑誌論文2、学会発表1件。

(3)2020年度

当初は『自衛』のフィルム・デジタル資料の読解を継続する予定であった。機材の調達に時間を要してしまったため、予定を変更して、昨年度に実施したプロートによる小説の読解を継続することにした。彼の名前はカフカの紹介者として広く知られているにもかかわらず、小説の日本語訳は出版されていない。商業出版を想定して、該当年度は『ユダヤの女たち』についての読解・逐語訳を進めた。年度末には該当小説の出版企画書を提出し、訳稿の一部を完成させた。本研究に関連するドイツ文学・ユダヤ人研究に関する知見について、地元新聞の秋田魁新報社に記事・書評をそれぞれ発表した。その他2件。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中村 寿	4. 巻 46
2. 論文標題 マックス・プロートの『ユダヤの女たち』について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 独語独文学研究年報	6. 最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村寿	4. 巻 45
2. 論文標題 リヒャルト・ハルマツの旧オーストリア 『ドイツ系オーストリアの政治 オーストリアのリベラリズムと外交政策についての研究』（2）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 独語独文学研究年報	6. 最初と最後の頁 26-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村寿	4. 巻 17
2. 論文標題 『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』（1907～1938）の研究への予備的作業 三十周年記念号の回顧企画を通じて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 プレーメン館	6. 最初と最後の頁 94-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村寿
2. 発表標題 マックス・プロートの"Juedinnen. Ein Roman"（1911）について
3. 学会等名 北海道ドイツ文学会 第87回研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村寿
2. 発表標題 第一次世界大戦期におけるユダヤ思想の展開: ビルンバウム・ブーバー・コーヘン
3. 学会等名 北大思想史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

翻訳 中村寿訳、『ユダヤの女たち』マックス・プロートの小説 フーゴ・ヘルマンによる談話、『プレーメン館』(18)、2020、88-92 新聞記事 中村寿、(2)「コレラ禍のヴェニスに死す」感染症 世界×文化 秋田大学教育文化学部発、秋田魁新報社、2020、8-8 書評 中村寿、對馬 達雄・著『ヒトラーの脱走兵』、秋田魁新報社、2020、15-15

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------